

帯広市八千代A遺跡出土土器の再整理 (1)

— 5地点出土の土器群 —

Early Jomon pottery from Yachiyo A site in Obihiro city (1)

北沢 実^{※1}
Minoru KITAZAWA

はじめに

帯広市八千代A遺跡は帯広市街地の南西約30km、日高山脈の山麓に近い標高280m前後に位置する縄文時代早期前半、曉式土器期の集落遺跡である。遺跡面積は約20万㎡。農地造成に伴う発掘調査が1985～88年(昭和60～63)に帯広市教育委員会によって1～5地点とした13,163㎡について行われ、その成果は調査報告書として刊行された(帯広市教委1990)。

しかし、同書では諸般の事情から遺構関連資料を中心に取扱ったため、結果として遺構外出土遺物に多くの未報告資料が残された。この中には5地点出土の貝殻文系平底土器群を主体とした資料をはじめ、2地点出土の条痕文系平底土器群、1地点出土の絡条体圧痕が施文された曉式土器群など縄文早期前半期の良好な資料が含まれる。これらについては筆者がその一部を紹介した経緯はあるものの十分な資料提示には至っておらず(北沢1994・2008, 北沢・大鳥居2009)、本稿で未報告資料の紹介を順次図ろうとするものである。

1. 八千代A遺跡5地点出土土器

1-1. 5地点の概要

5地点は遺跡範囲のもっとも南西に位置し、1987(昭和62)年に1,601㎡の調査が行なわれた。調査区は北側を低湿部、西側は東一西に伸びる沢状の地形に挟まれた標高276～277m前後の低位面に立地する。調査区内は南の微高地から北の低湿部に向かう緩斜面で、遺物は北側の標高の低い範囲に多く分布する。包含層の大半は耕作により攪乱されており、耕作土は重機(ブルドーザー)で除去後、黒色土(V層)下部からこの下位に堆積する暗褐色土(VI層)を手掘りで行なった。

出土した遺構は落し穴1基、時期不明の焼土3ヵ所と沼尻式相当期とみられる土坑1基がある。出土した土器は曉式(十勝縄文I a期¹⁾)、沼尻式相当の貝殻文系平底土器群(I b期)、東釧路I式相当の条痕文系平底土器群(I c期)、東釧路II式(II a期)、北筒式(V b期)、幣舞式(VII a・b期)に分類される547点²⁾があり、沼尻式相当の土器群が主体を占める。

1-2. 資料概観

1は曉式土器の新期段階(北沢2008)に特徴的な大ぶりの円形刺突が施文された資料。

2～21は沼尻式相当の土器群である。個体数は口縁部破片の観察から図示した16程度と推測されるが、器形の復原に至った資料はない。この類の文様要素は貝殻腹縁文(A)を主体に、沈線文(B)、刺突文(C)、キザミ(D)、条痕³⁾(E)、無文(F)があり、これらが複合して施文されるものが多い。貝殻腹縁文は施文具の放射肋痕が連続して明瞭に残されるもの(A1)、破線状(A2)、点線状(A3)、貝殻外面の押圧によるとみられる「D字」の連続(A4)の4種、沈線文は文様の区画・割付用とみられる細沈線(B1)と明瞭な沈線(B2)の2種に細分して以下の記載を行なう。

2は山形突起を有し突起部は肥厚する。文様はA2+B1で、外切の口唇にはA2が斜位に施文される。3は突起をもつ波状口縁とみられ、頂部から縦位の刺突が垂下する。文様はB1で菱形に区画

※1 帯広百年記念館

され、区画内にA 2が同形に充填されたものが多段に施される。内面は横位の貝殻条痕が施され、上部にはA 2が斜位に施文される。4は波状口縁とみられ、波頂部から垂下する縦位の刺突が施され、口縁部には菱形構成とみられるB 2、口唇は平坦に調整され直径1 mmほどの円形刺突が施文される。5は口唇断面は尖り気味で、口縁には縦位→横位のA 3が施され、両者は異なる貝種もしくは施文方法による可能性がある。縦位のA 3はロッキングによる単位がみられる。6は縦位の条痕が施された後、貝殻腹縁文A 3が施文される。口唇上には横長の刺突とA 2が施文される。7は口唇がやや尖り気味で、A 3が横位に施される。土坑出土。8は口唇には横位のA 1が部分的に、口縁には同種の貝殻腹縁文が密に施文される。内面は横位に条痕が施され、下部は条痕後ナデ調整が施される。9は波状口縁で、外切の口唇上にはキザミが施され、口縁には縦位→横位のA 1が施される。10は口唇上にA 4とみられる貝殻腹縁文、口唇下に2条の平行沈線、この下位に横位のA 1が施文される。11は口縁を欠くが、山形突起をもつ器形と思われ、垂下する縦長の刺突を基線とし、2条単位の横走するB 2間にA 1が充填される。12は大きな波状口縁とみられ、口唇に沿うB 2と下位のB 2間にA 1が施文される。口唇上と内面上部にはA 4が施文される。13は口縁は緩い波状を呈し、文様は上部はA 3、下位はA 1。14は口唇直下は横位、下位は斜位にB 1が施文され、この間をA 3が充填される。15は波状口縁の頂部から垂下する刺突が施され、口縁には横位のB 2とA 1が施文される。16は突起部がわずかに肥厚し、口唇にキザミ、口縁部には同様の施文具による刺突で山形に構成される。17は山形突起をもつ無文土器。18は貝殻腹縁文が縦横に施文された胴部。縦位はA 3、横位はA 1でいずれもロッキングによる施文と見られ、両者の施文具は異なるようである。19は縦位の刺突が施され、ロッキングによるA 1が施文される。20・21は底部。いずれも横位のA 3が施される。21は底径5.6 cmを測り、腹縁文はロッキングによるとみられる。

22～26は条痕文系平底土器群。個体数は10程度と推測されるが、器形の復原に至った資料はない。22は幅1 cm前後の指頭様の工具で横位の調整が内外面に施された無文資料。23～25は植物質工具による横位の調整(条痕)が施されたのちナデ調整が施される。25は内面に炭化物が著しく付着する。26は底径10.2 cmの底部、植物質工具による調整痕が器面・底面に残される。

1-3. 小 括

八千代A遺跡5地点出土の土器について、沼尻式相当の資料を中心に紹介した。出土資料は器形・全体の文様構成などに不確実な点があるが、文様要素・構成にバリエーションをもつ資料群である⁴⁾。このうち縦位の腹縁文A 3が施文された資料(5)は、大沼忠春(1999)が駒場式に関連するとして注意したものである。また、縦位の条痕をベースとした資料(6)は暁式土器との関連を想起させるなど、沼尻式土器群の系譜を検討する上で一つのキーとなる資料群といえよう。

- 1) 調査報告書で用いた土器分類
- 2) 調査報告書の一覧表・記載を訂正する。内訳はI a期47点、I b期254点、I c期179点、I bもしくはI c期24点、II b期6点、V b期16点、VII b期24点。
- 3) 条痕の工具は、3は貝殻、7・8は貝殻の可能性が高いが、他は貝殻による可能性もあるが判然としない。
- 4) 十勝地域で当該資料の出土が報じられているのは、管見では帯広市八千代A 1・2・5地点、豊頃町高木2、浦幌町平和・生剛A・新吉野台細石器、大樹町下大樹、鹿追町鹿追2、池田町青山Aの各遺跡である。

引用文献

- 大沼忠春(1999)「北海道地方 早期～晩期」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会 108-117頁
 帯広市教育委員会(1990)『帯広・八千代A遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第8冊
 北沢 実(1994)「八千代A遺跡第1地点遺構外の土器—絡条体圧痕が施文された「暁式土器」群」『池田3遺跡—統一』池田町教育委員会 70-75頁
 北沢 実(2008)「テンネル・暁式土器群 貝殻沈線文系平底土器」『総覧 縄文土器』アム・プロモーション 54-59頁
 北沢 実・大鳥居千鶴(2009)「十勝地域の縄文土器概観」『帯広百年記念館紀要』第27号 1-26頁

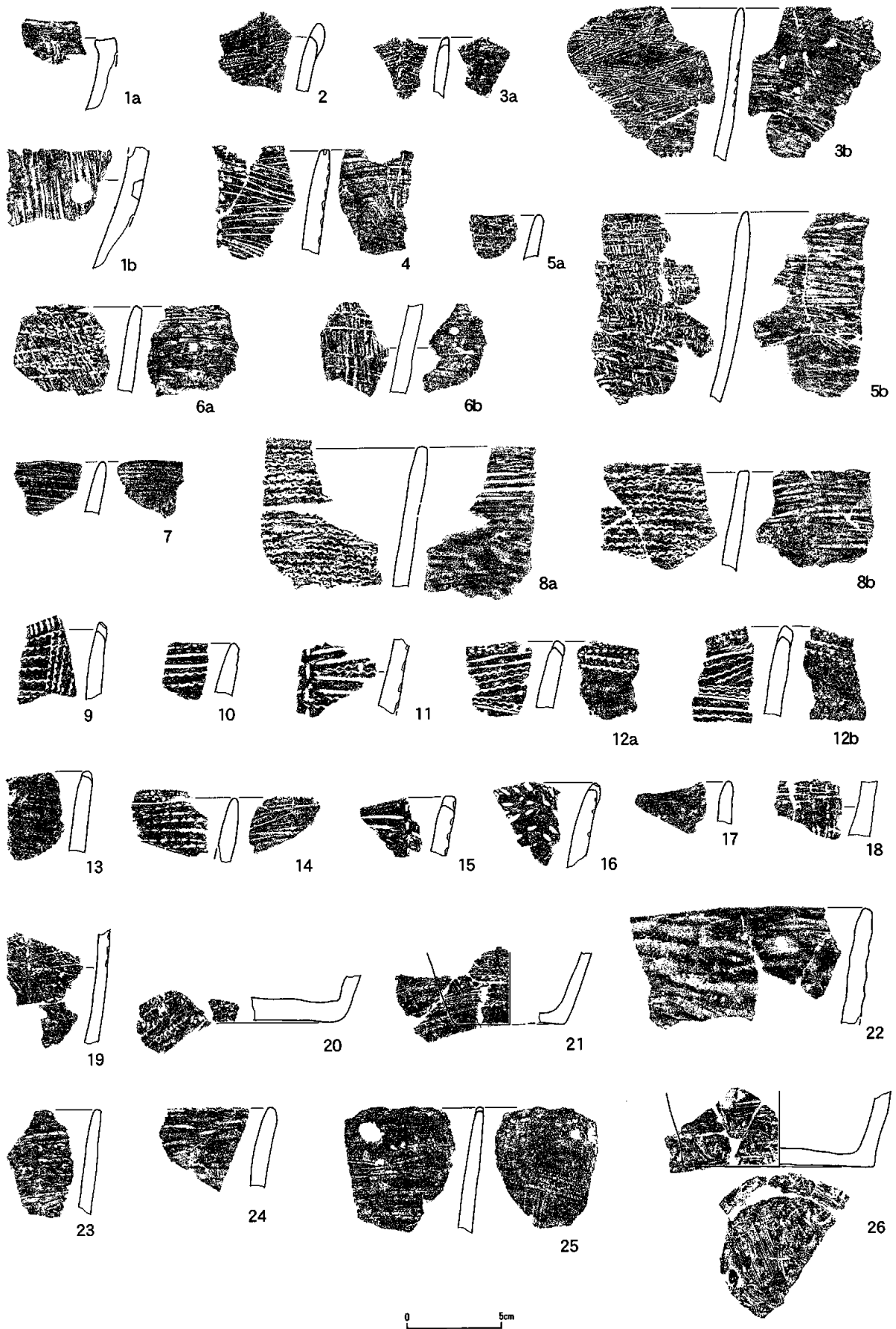


図1 帯広市八千代A遺跡5地点出土土器 (S=1/3)



写真1 帯広市八千代A遺跡5地点出土土器 (S=1/3)